

和歌山県の歌の研究

指導主事 小畑日出夫

【要旨】 和歌山県には全国に誇る数多くの歌がある。本稿は、和歌山県民歌、和歌山県の市町村の歌、串本節、根来の子守歌、白浜音頭等について、その生い立ちや歌詞に込められた思い、楽曲の分析などを行い、ふるさと和歌山の再発見の一助になることをねらいとしたものである。「和歌山の個性ある教育の創造」の参考になるものとする。

【キーワード】 県民歌、市町村歌、節、子守歌、音頭

1 はじめに

「われは湖の子さすらいの 旅にしあればしみじみと 昇る狭霧やさざなみの 滋賀の都よいざさらば」小口太郎作詞、吉田千秋作曲の「琵琶湖周航の歌」である。

今から20数年前、研究会に出席するため滋賀県に出かけた。研究会終了後、懇意の先生方と食事会に出かけた。宴もたけなわの頃、滋賀県の方々がおもむろに歌い出した曲が、この「琵琶湖周航の歌」であった。肩を組み、実に堂々と誇らしげに歌う歌声に圧倒されたのを鮮明に思い出す。演奏後、和歌山県の歌を催促された。しかし、不覚にも急には思いつかなかった。考えあぐね歌ったのが、西条八十作詞、中山晋平作曲の「鞠と殿様」であった。このような有名な歌があるにもかかわらず、すぐに思い浮かばなかったことに恥ずかしさを覚えた。滋賀県からの帰途、「まりと殿様」以外の和歌山県の歌についてあれこれ思いを巡らせた。

今回、執筆の機会を得、私の長年の懸案であった、和歌山県の歌についてまとめることとする。

2 和歌山県民歌

全国各地には、それぞれ自治体の歌がある。自治体の歌とは、都道府県及び市町村が制定している歌のことである。このうち都道府県の歌については、現在、ほぼすべての都道府県で制定されている。これらは、明治時代に起源を持つ歌や第二次世界大戦後に連合軍最高司令官総司令部の奨励を受けて作られた歌、あるいは、近年になって公募によって作られた歌である。しかし、大半の自治体では、自治体の歌があることすら知らない、あるいは知っているも歌えない等、有名無実の感を否めない。そのような中、県民のほとんどが歌える県民歌がある。それは、長野県民歌「信濃の国」（浅井泷作詞、北村季晴作曲）である。

この歌は、1900年に作曲され、当時の師範学校で歌われていた曲であり、その時の学生がやがて教師となり、各小学校で「信濃の国」を教え、親から子へ、子から孫へと歌い継がれ、県民歌となったそうである。なお、この曲は現在、信州大学教育学部附属長野小学校の校歌でもある。

「信濃の国」は、ヘ長調、四分の四拍子でメロディが覚えやすく誰でも歌える曲である。歌は、6番までであるが、特徴的なのは4番である。4番のメロディが他とは全く異なっており、構成的にも独創に富んだ曲である。歌詞は文語体で書かれており難しいが、善光寺、御岳、千曲川、諏訪湖等、長野県を代表する名所や地名が散りばめられ、親しみやすい内容となっている。

さて、和歌山県にも長野県に匹敵する素晴らしい県民歌がある。西川好次郎作詞、山田耕筰作曲、「和歌山県民歌」(楽譜1)である。

楽譜 1

1 ほのぼのと かおる浜木綿
陽に映ゆる 緑の起伏
和歌山は 常春の国
人の和と 文化を添えて
※いや更に 伸びよ栄えよ
ふるさとは つねに微笑む

2 南国の 息吹ゆたかに
野は稔り 街はおどる
和歌山は 幸を産む国
汗に明け 火花に暮れて
※(くり返し)

3 くろがねの 軌道ゆくところ
黒潮の しぶきはめぐる
和歌山は 明日を呼ぶ国
とこしえの 若さに乗りて
※(くり返し)

この曲の誕生については、昭和54年8月にビクターレコード株式会社が製作したレコードの解説に次のような記載がある。

戦後間もない昭和23年、某篤志家から、後世に残るものを何か考えてほしいと、和歌山フィルハーモニック・ソサエティ委員長である竹中重雄氏に話があり、音楽家である同氏は県民歌の創作を提案され、民間団体の和歌山フィルハーモニック・ソサエティが中心となって、この計画を進めた。

和歌山県民歌は、選者を作詞部門佐藤春夫氏、作曲部門山田耕筰氏として一般公募された。当時の新聞には当選賞金1万円と記されているが、同新聞の広報欄の大売り出しには、学習座机840円、学童帽子60円等々である。食べるにこと欠くこの時代に、よくぞこのような計画がなされたものである。やはり愛郷の精神が強く、和歌山再建の熱意に燃えていたからであろう。

同年8月、待望の和歌山県民歌が誕生。作詞は、西川好次郎氏が金的を射止められたが、作曲公募59編のなかからは優秀作品がなく、病中を押して選者山田耕筰氏自ら作曲された。(原曲は混声四部合唱)

応募の選評

佐藤春夫氏(昭和23年4月18日、毎日新聞より)

思ったより水準が高く情緒豊かに明朗で県民性がよく現れているのに興味を感じ

た。ある県でも県民歌の選をしたが理屈っぽく、なんとなくあきたりなかったが、この県民歌は面白く感じた。

当選作は、たいそういきとどいた作と思ったら、西川氏は、度々全国的なこの種のものに当選しているのだそうだ。

山田耕柝氏（竹中重雄氏宛書簡より）

応募作品の中では、遺憾ながら歌詞の場合のように香ばしい成績は得られなかった。それは、作曲ということが、作詞よりも一層専門的知識と楽才を必要とするためであり、一般社会の作曲に対する関心も経験も少なく、従ってその水準が低いことに帰因するので直ちに応募者を責める訳にもいくまい。

西川好次郎氏（昭和23年4月18日、毎日新聞より）

南国紀州を愛する熱情を傾けて作詞した。真に胸底から湧き上る平和へ、勤労へ希望へ真心に燃えての作です。郷土くまなく歌声の澄み流れることを望んでやまない。

この種の山田耕柝氏の作品の中では、ひときわ格調が高く、音楽的にも高度なテクニックが要求され、歌うものをしてあきさせないのは、和歌山の良さをすべてうたいあげられているなかにも、時代を越えて歌われるよう考え尽くされた歌詞とともに名曲であると評価されてきた作品であるからに他ならない。

このため、行進曲などに編曲しようという話はあったが、県民歌のイメージをこわすというおそれから手をつけなかった。しかし、普及のためには、ぜひ行進曲等にして運動会やスポーツ大会に使うて親しみのある県民歌にしようとして県民歌誕生三十年余の年にあたりレコードを制作してその記念とした。

作詞の西川好次郎氏は、1903年、和歌山県日高郡寒川村で生まれた。1920年、和歌山師範臨教部を卒業後、教員となり、1955年に美山村立初湯川小学校長を最後に教職を退くまで、和歌山県の教育に力を尽くした人物である。西川氏は、「歌の先生」として全国歌謡界に名をはせた作詞家でもある。1934年、報知新聞社が募集した「皇太子殿下御降誕奉祝歌」に応募し、全国5800編の中から1等に選ばれて一躍有名になった。以後50年を超える作詞活動の中で当選歌140編、入選作品は数百編を数えた。西川氏の作品は、リズム感にあふれ、作曲しやすい詞であると評され、市町村歌、校歌、警察歌、社歌、団体歌の他、音頭、小唄まで幅広い作品がある。主な作品として、「和歌山県民歌」、「紀州おどり」、「岸和田民謡」、「新宮音頭」、「新海南音頭」等がある。また、日高高校、御坊商工高校（現・紀央館高校）、和歌山工業高校をはじめ、県内の小・中学校を中心に全国で70校を超える校歌の作詞をしている。1976年には県文化功労賞を、1983年には文化庁の地域文化功労者として文部大臣表彰を受けている。

西川氏の功績をたたえる碑が、旧美山村（現・日高川町）の役場近くにある。

歌碑には、「紀州美山路みどりの晴着里の花さえ絵のような・・・」と、ふるさと美山の素晴らしさを詠んだ歌が彫られている。そして、その歌碑の傍らには、和歌山県民



歌碑



和歌山県民歌

歌を刻んだ碑がたたずんでいる。

作曲は山田耕筰氏である。山田氏は、「赤とんぼ」「ペチカ」「待ちぼうけ」等の童謡や歌曲を作曲しただけでなく、交響曲、オペラ、管弦楽曲等も作曲するなど、我が国の音楽界を代表する人物である。山田氏の生い立ち及び功績について記す。

山田氏は、1886年、東京都に生まれた。幼年時代、義兄エドワード・ガントレットに西洋音楽の手ほどきを受け、関西学院中等部を経て、1908年、東京音楽学校（現・東京芸術大学）を卒業した。また、1910年から1913年まで、ベルリンの王立アカデミー音楽院に留学し、当時の音楽界の権威であったブルッフやヴォルフに師事している。この時、日本人初の交響曲「かちどきと平和」を作曲している。帰国後の1914年には、日本最初の交響楽演奏会を開催する等、日本において西洋音楽の普及に努めた人物である。また、ニューヨークにあるカーネギーホールで自作の管弦楽曲を演奏したり、ベルリン・フィルハーモニーオーケストラやレニングラード・フィルハーモニーオーケストラ等を指揮するなど国際的にも活動し、欧米で名前を知られた最初の日本人音楽家である。1936年にはレジオンドヌール勲章、1941年には朝日文化賞、1956年には文化勲章を受章している。

西川氏と山田氏の出会いは、美山村立川原河小学校（現・日高川町）校歌の作曲からである。このことについて、西川氏の著書「山びこよ 雲にのれ」の中に、次のような記述がある。

昭和24年の3月、川原河小学校の校歌の作詞にかかった。私は僻地一級地にある山村へ当時校長として奉職中であった。何としても新しい時代の夜明けにふさわしい児童心理をゆさぶる校歌をと念願した。かくて、校歌の作詞はできたが、さて作曲はということになった。その時私は、とてつもないことを考えついた。それは、この作曲を日本最高の権威者である山田耕筰先生にお願いしては、ということだった。そこで勇を鼓して、作詞を添えて山田先生に依頼の手紙を出してみた。おそらく、一顧もしてくれないだろうと予想はしていた。というのは、山村の小さな学校のことで、作曲料もわずかしお出しできない苦衷を書き添えていたからである。ところがどうだろう。山田先生から早速返事を下さったのである。私はその返信を手にした時、全く半信半疑だった。お手紙には、大要次のようなことが書かれていた。

「・・・正式に作曲を受理するためには、山田耕筰作曲協会を通じてでないといけないことになっています。しかし、貴殿から送られてきた校歌の歌詞はまことにすばらしい。このような詞は日本ではあまり見たことがなく、アメリカでわずか二、三篇見ただけです。この作品であれば、進んで作曲してあげましょう。作曲料は協会へ納入していただくのですが、最低参万円必要です。そこで、私から貴殿に貳万円送付しますから、壹万円を加えて協会へ申し込んで下さい・・・」私は先生の手紙を読み終えた時、感激で胸がつまり、とめどなく涙が頬を伝った。 ※1

さて、和歌山県民歌は、実に複雑な楽曲となっている。注目すべきは拍子である。わずか16小節の間に5回拍子に変化する。まず、四分の四拍子で始まり、後半では、四分の二拍子、四分の三拍子、四分の二拍子となり、最終的には、四分の四拍子に戻る。全国の自治体歌の中では、「沖縄県民の歌」が3度、「富山県民の歌」が2度、曲の途中で拍子に変化するが、和歌山県民歌のように、これほど拍子の変化を伴った楽曲はない。拍子の変化は、芸術性の高い楽曲で度々見られる。

拍子記号は、アンダンテマエストーソ（Andante Maestoso）である。アンダンテとは、「歩く速さで」、また、マエストーソとは、「堂々と威厳をもって」の意味である。すなわち、アンダンテマエストーソとは、「ややゆっくりと荘重に」と訳される。言い換えれば、「堂々と威厳をもってたっぷりと歌いあげる」ことを作曲者は意図している。軽快なテンポの曲が多い全国の自治体の歌の中では異質な楽曲であるといえる。

演奏に関しても、技巧的な部分がある。例えば、出だしである。この曲は、弱起（アウフタクト）で始まる。弱起は演奏上、重要な意味を持っている。例えば、テヌートやスタッカート等の記号をつけることにより、容易に演奏効果をあげられるという特徴を持っている。インパクトのある出だしである。その他、出だしと同じリズムが随所で繰り返されるのも本曲の特徴である。

和歌山県民歌は、格調高かつ複雑な構成をなす楽曲である。往々にして格調高い楽曲は、その芸術性ゆえ、なかなか歌にくいものである。本楽曲を歌いこなすには、適切な練習が必要となる。なお、前述の「信濃の国」は、長野県の音楽学会が発行している副読本「みんなのうた」に掲載され、音楽の時間に指導している学校もあると聞く。

和歌山県民歌の演奏は、これまで、下記のような団体が行っている。

1949年	コロビアレコードがS P 盤を制作 歌唱 藤山一郎 伴奏 コロビアオーケストラ
1970年	ビクターレコードがE P 盤を制作 歌唱 立川澄人 伴奏 ビクターオーケストラ (昭和46年の黒潮国体で県民歌として使用)
1979年	ビクターレコードが17cm L P 盤を制作 行進曲として編曲したものを加え、四形態が収録 1 男声独唱 2 混声四分合唱 3 オーケストラ演奏 4 ブラスバンド演奏 独唱 三室 堯（バリトン） 合唱 和歌山北高校合唱部 星林高校合唱部 県立和歌山商業高校合唱部 桐蔭高校合唱部 向陽高校合唱部 和歌山東高校合唱部 信愛女子短期大学附属高校合唱部 オーケストラ 朝比奈 隆指揮 大阪フィルハーモニー交響楽団 ブラスバンド 泉 真佐男指揮 和歌山県警・兵庫県警音楽隊

現在、県立学校や和歌山県教育センター学びの丘が使用している和歌山県民歌のCDは、角荘三編曲、神谷慧指揮、瀬田友美伴奏、フラウエンコール田辺による演奏のもので、平成14年に西牟婁地方教育事務所が作製したものである。

指揮者の神谷氏は、かつて田辺市内の中学校に勤務され、田辺市立東陽中学校合唱部・田辺市立高雄中学校合唱部を指導し、NHK全国学校音楽コンクール・MBSこども音楽コンクールで、それぞれ全国優勝に導いた方である。音楽への造詣が深いだけでなく、様々な分野において秀でた人である。

伴奏者の瀬田氏は、大阪音楽大学を優秀な成績で卒業された才媛である。筆者は、か

つて田辺市内の小学校に勤務していたが、その時の教え子である。「梅檀は双葉より芳し」と言われるように、幼少の頃より音楽的才能に秀でた人であった。

フラウエンコール田辺は、田辺市を中心に活動を続けているママさん合唱団である。平成12年には、香川県で開催された「第23回全日本おかあさんコーラス全国大会」に出場し、優秀な成績を修められた実績を持つ合唱団である。神谷氏の指揮による「和歌山県民歌」は、実に荘厳で聴き応えのある演奏である。

和歌山県教育センター学びの丘が立地する田辺市は、「合唱の町」である。市内の小・中・高等学校は、毎年開催される、NHK全国学校コンクールやMBSこども音楽コンクール等に出場し数々の栄誉に輝いている。筆者も昭和60年度から平成5年度までの9年間、田辺市内の小学校に勤務し、これらのコンクールに出場する機会を得た。在勤中、先輩教諭から聞いたことであるが、かつて「MBSこども音楽コンクール田辺地区大会」では、コンクール開始前に「和歌山県民歌」を全員で歌っていたが、いつのまにか歌われなくなったそうである。この慣習がなくなったのは残念である。和歌山県においても、長野県のように学校音楽に県民歌を取り入れ、県民歌に込められたふるさとへの想いを子どもたちに伝えて欲しいと思う。

3 市町村の歌

和歌山県内の市町村にもそれぞれ自治体の歌がある。下は、2004年9月時点での市町村の歌を表したものである。

市町村名	作詞	作曲	歌名
橋本市	安西冬衛	野口源次郎	橋本市歌
九度山町	九度山町公民館選定	丹生健夫	九度山町民歌
かつらぎ町	芋瀬重治	藤山一郎	かつらぎ町民歌
那賀町	岡部芳子	中川知保	那賀町町民歌
桃山町	磯 喜与之	打垣内 正	桃山町歌
岩出町	亀田忠彦	北原雄一	岩出町民歌
花園村	梅田恵以子	森川隆之	ホタルブクロ咲く村に
	梅田恵以子	森川隆之	村はうの花
和歌山市	佐藤春夫	山田耕柝	和歌山市市歌
野上町	島田陽子	鞍富誠三	野上町民歌
美里町	空山繁伸	森川隆之	緑もゆるまち（イメージソング）
海南市	上田節夫	打垣内 正	海南市歌
下津町	阪田寛夫	川崎祥悦	下津町町歌
有田市	藤岡久夫	廣田達男	有田市歌
金屋町	桧尾貞子	鞍富誠三	金屋町民歌
清水町	滝田常晴	杉本真人	光と風とほほえみと（イメージソング）
由良町	西川好次郎	北原雄一	由良町歌
御坊市	西川好次郎	片山頼太郎	御坊市歌
川辺町	谷口 修	山本謙一	川辺町民歌
中津村	西川好次郎	北原雄一	ふるさと中津
美山村	西川好次郎	北原雄一	美山の歌
南部川村	今井規清	北原雄一	南部川村歌

白浜町	岡本淳三	北原雄一	白浜町町歌
龍神村	西川好次郎	北原雄一	龍神村民歌
古座川町	能登浜吉	玉木宏樹	このまちが好き（イメージソング）
那智勝浦町	若林芳樹	石桁真礼生	那智勝浦町町歌
熊野川町	和田正一	大久路格也	ふる里が呼んでいる
新宮市	佐藤春夫	信時 潔	新宮市歌

これによると、西川好次郎氏、佐藤春夫氏、北原雄一氏、石桁真礼生氏、森川隆之氏など、和歌山県にゆかりのある人々の作品が多いことがわかる。

(1) 和歌山県出身の作家の市歌

①和歌山市市歌

楽譜 2 は、佐藤春夫作詞、山田耕筰作曲の「和歌山市市歌」である。

楽譜 2



1 これ南海の鎮めぞと
南龍公が志
潜めし城は旧りにしを
城下の意気ぞ新たなる
星移り物変わるとも
常若の市和歌山市

2 見よ紀の川の川口に
民衆起ちて封建の
夢吹き払い新時代の
都市に産業興りたり
星移り物変わるとも
常若の市和歌山市

3 豈煤煙を誇らんや
風光ゆかしこの辺り
鶴鳴き渡る和歌の浦
高野の山も近くして
星移り物変わるとも
常若の市和歌山市

こわか の まち わ - か や ま - し -

作詞の佐藤春夫氏は、新宮市出身の作家である。佐藤氏の父は医師で、とりわけ文学に造詣が深かった。当時、木材業で繁栄していた新宮には、大石誠之助や西村伊作等、先進的な文化人が活動していた。このような環境の中、幼少時代を過ごし文学少年として成長した。1910年、慶應義塾大学に入学し、雑誌「スバル」等に詩歌を発表するなど、作家としてその才能を開花させていった。佐藤氏の著書は多種多様で、詩歌（創作・翻訳）、小説、紀行文、戯曲、評伝、自伝、随筆、評論、童話等あらゆるジャンルにわたっている。主な作品として、詩文集「我が一九二二年」、短編集「びいだあ・まいやあ」、訳詞集「草塵集」、詩集「佐久の草笛」、随筆集「白雲去来」等がある。

多くの市町村歌に共通することであるが、詞の内容は、名所旧跡、地名、人物、特産品、産業等を扱ったものが多い。「和歌山市市歌」においても、紀州徳川家始祖として知られる徳川頼宣（南龍公）や和歌山市を流れる紀ノ川、あるいは、遠き昔、万葉集で歌われた和歌の浦の景観等、和歌山市にゆかりのある人物、地名、旧跡が詠まれている。



和歌山城

②新宮市歌

楽譜3は、佐藤春夫作詞、信時 潔作曲の「新宮市歌」である。

楽譜3	
<p>くろしお めぐる きのみなみ</p>	<p>1 黒潮めぐる紀の南 熊野の都新宮市 蓬萊なりとその昔 徐福もここに來たりとか 山紫に水明く 人朗らかに情あり</p>
<p>くまののーみやこ しんぐうし</p>	<p>2 三つのみ山のひとつとて 速玉の神ましませば 水にも火にも砕けざる 金剛の都市新宮市 山紫に水明く 人朗らかに情あり</p>
<p>ほうらい なりと そのむかし</p>	<p>3 葺連なる九千戸 伝統深き文化の地 み熊野川の川口に 筏の港新宮市 山紫に水明く 人朗らかに情あり</p>
<p>じふくも ここに きたりとーか</p>	
<p>やまむら さきに みずきよく</p>	
<p>ひとほがーらかに なさーけーあり</p>	

「新宮市歌」の歴史は古く、1951年11月3日に制定されている。新宮市歌においても、「和歌山市市歌」同様、名所旧跡や人物、産業が詠まれている。

はるか昔、秦の始皇帝の命令で、不老不死の薬を求め、新宮市に渡来したと伝えられている「徐福」や熊野三山の一つである熊野速玉大社が、あるいは、かつて木材の集積地であった新宮市の風景が詠まれている。



熊野速玉神社

作曲は、大阪出身の信時潔氏である。信時氏は、1915年、東京音楽学校（現・東京芸術大学）卒業後、同校に勤務し、我が国の音楽界を牽引した人物である。1942年に日本芸術院会員となり、1964年には、文化功労賞を受賞している。主な作品と

して、カンタータ「海道東征」、歌曲「海行かば」「沙羅」「小倉百人一首より」、ピアノ曲「木の葉集」「日本俚謡集」「六つの舞踊曲」、チェンバロ曲「チェンバロのための東北民謡」等がある。また、音楽家を志すものにとって必修となる教則本である、訳書「全訳コールユーブンゲン」を刊行したことは特筆すべきことである。

(2) 和歌山県出身の作曲者の町歌

楽譜4は、若林芳樹作詞、石桁真礼生作曲の「那智勝浦町町歌」である。

楽譜 4	
 <p>あ う ま つ り の ほ あ か り</p>	1 扇まつりの火あかりに 滝うるわしく神寂びぬ 歴史もゆかしみ熊野の 伸びゆく清らに和む町
 <p>に た さ う る わ し く か ん さ び</p>	那智勝浦町 那智勝浦町 みなぎる力あり
 <p>ゆ れ さ し も ゆ か し み く ま の の</p>	2 湯の香ほのぼのただよひて 風あたたかくつつじ炎ゆ 蜻蛉のつばさ紀の国の かがやく未来を展く町
 <p>の ひ ゆ く き よ ら に な ご む ま</p>	那智勝浦町 那智勝浦町 あかるき希望あり
 <p>ち な ち か つ う ら ち ゅ う な ち か つ う ら</p>	3 睦みいそしむ六つの郷 幸ゆたかなる海広し みどりの山河水清く 文化を伝えて薫る町
 <p>ち ょ う み な ぎ る ち か ら あ り</p>	那智勝浦町 那智勝浦町 常磐に栄あれ

作曲の石桁真礼生氏は、和歌山県出身の音楽家である。石桁氏は、1939年、東京音楽学校（現・東京芸術大学）を卒業後、1946年同校の講師としてスタートし、後に東京芸術大学名誉教授に至った我が国を代表する音楽家である。主な作品として、劇音楽「女の平和」、オペレッタ「河童譚」、交響曲「ハと嬰へを基本とする」、カンタータ「千手観音」等がある。また、著書として、音楽を志す人のバイブルである、「楽式論」「楽典」等がある。どのような経緯で作曲を引き受けたのかは不明であるが、「那智勝浦町町歌」は、リズム感あふれる名曲である。なお、原曲には、単声二部合唱又は混声四分合唱と表記されている。混声四分合唱で演奏された「那智勝浦町町歌」を是非とも拝聴したいものである。

下は、那智勝浦町役場に保管されている町歌制定の趣旨書である。

那智勝浦町町歌制定の趣旨
昭和30年4月1日町村合併により、那智勝浦町が誕生した。
町を形成する旧六町村は、いよいよ堅く結束して、熊野信仰の中心地、観光、農林、漁業の活気ある産業の町として伸展している。
わがふるさと那智勝浦町は、美しい風光と伝統古い文化に恵まれ、活力あり、未来への希望にあふれ、永遠の繁栄が期待されている。

ここに町制施行30周年を記念して、町歌を制定した。

私共は、ふるさと那智勝浦町を讃え、その向上発展を願って、この町歌を声合わせて歌い、歌い継いで行きたい。

(3) 町のイメージソングとして作曲された歌

楽譜5は、空山繁伸作詞、森川隆之作曲の美里町イメージソング「緑もえるまち」である。

楽譜5



1 君がいつか旅に出るなら
スニーカーとジーンズで
愛する友とたずねてごらん
笑顔あふれるまちを
いつか聞いたあのことは
あのぬくもりが
忘れかけてたふるさとのある
緑もえる美里のまち

2 君がいつか日々の暮らしに
疲れ果てた時には
愛する恋人とたずねてごらん
心なごむまちを
幼いころの子守歌
母の背中に
忘れかけてたふるさとのある
緑もえる美里のまち

作曲者である森川氏は、和歌山大学教育学部教授である。森川氏は、「紀州はふるさと」「天神崎の四季」等、和歌山県を題材にした曲を数多く手がけている。市町村の歌では、美里町イメージソングの他にも、「花園村の歌（ホテルブクロ咲く村に・村はうの花）」を作曲している。

楽譜には、速度記号92～96「優美に」と書かれている。歌詞には、スニーカーやジーンズといった現代風の表現がある。歌詞にあった、アップテンポで軽快な本曲は、実に清々しいさわやかな印象を与える。素晴らしい曲である。

美里町は、平成18年1月1日に、野上町と合併し紀美野町となった。このイメージソングをいつまでも歌い続けてほしいものである。

(4) 消えつつある市町村の歌

平成の合併に伴い、2004年10月1日の「みなべ町」の誕生を皮切りに、7市36町7村であった和歌山県は、2006年3月に、8市21町1村となる。合併した市町村の多くは、自治体名の変更を余儀なくされている。それに伴い、かつて存在した市町村の歌も消えざるをえない状況も予想される。それらの中には、芸術性の高い作品も見られる。いくつかを紹介したい。

楽譜 6 は、阪田寛夫作詞、川崎祥悦作曲の下津町町歌である。この曲は、1973年1月19日に制定されたものである。

作詞の阪田氏は、「うたえバンバン」や「大きな栗の木の下で」、外国民謡「赤い川の谷間」等、子どもたちに馴染みの深い作品で知られる作詞家である。また、作曲の川崎氏は、「山のいぶき」等の合唱曲で知られる作曲家である。

楽譜 6

 <p>きいのはつきは はなみかん かおるしもの やまやまに</p>	<p>1 紀伊の五月は花みかん 薫る下津の山々に 冬は黄金の灯がとる 枝もたわわに 心つくしてみのらせて みかんの下津 色も香も下津</p> <p>2 紀伊の熊野の詣で道 古い社や仏たち 光るまどかな風にのり 鳥は飛ぶ飛ぶ 加茂の川瀬を見おろしに 文化の下津咲きにおう下津</p>
 <p>る樹はこかの ひがともーる えだもたわー</p>	
 <p>わーにこころつくして みのらせてみかんのしも</p>	
 <p>ついろもかもしもつ</p>	

楽譜 7 は、磯喜与之作詞、打垣内正作曲の桃山町歌である。

作曲者の打垣内氏は、元和歌山大学教育学部教授である。和歌山県の音楽教育の発展に尽力され、1981年には、県文化功労賞を受賞している。和歌山大学寮歌「花の霞に」をはじめ、海南市立大野小学校や新宮市立光洋中学校等、和歌山県の公立学校の校歌も数多く手がけ、その数は40数曲にも及ぶ。

楽譜 7

 <p>きすいのながしれとこしえにき</p>	<p>1 紀水の流れとこしえに 最初が峰の緑こく 歴史ゆかしきわが郷土 世紀の朝に幸をよぶ 今躍進のああ桃山町</p> <p>2 桃源郷に風かおり 野山に映ゆる柿みかん めぐみゆたかなわが郷土 世紀の朝に幸をよぶ 今躍進のああ桃山町</p>
 <p>いしよがみねのみどりこく</p>	
 <p>れまじゆかしきわがきょうと せいぎのあまにさちをよびいま</p>	
 <p>やくしんのあももやまちょう</p>	

楽譜 8 は、西川好次郎作詞、北原雄一作曲の「美山の歌」である。

作曲者の北原氏は、東京音楽学校（現・東京芸術大学）卒業の作曲家である。音楽科教員を経て、1951年より和歌山県教育庁に勤務され、1968年からは、四国女子短期大学音楽部教授として後進の指導にあたられた人である。

北原氏の手がけた作品は多く、校歌・社歌・童謡・制定歌等、様々なジャンルの曲を世に送り出している。西川好次郎との共作も多く、市町村歌では、中津村（現・日高川町）、龍神村（現・田辺市）の歌を作曲している。

楽譜 8

1 城が森から明け渡る
山に光の朝がある
いつも若さの朝がある
ああ伸びる美山へいっぱいにくらし
くらしあかるとい花咲かそ

2 日高川さえきらめいて
里にかがやく汗がある
土ととりくむ汗がある
ああそろ美山の足並みへ
あすのあすのしあわせ脈うたそ

4 串本節

ソーラン節（北海道）、津軽あいや節（青森県）、安来節（島根県）、よさこい節（高知県）、鹿児島小原節（鹿児島県）等、全国各地に「節」がある。「節」とは何か。標準音楽事典（音楽の友社）には次のように解説している。

邦楽用語である。

- (1) 広義には、音楽または曲節という意味。狭義には、旋律または旋律型をさす。単独に節として用いたり、＜・・・節＞のように合成語として用いる。「義太夫節」「虎造節」など。
- (2) 浄瑠璃や謡曲などの語り物音楽において「コトバ」という語に対するもので、旋律的な部分の称。
- (3) 三味線組唄用語。歌詞の間に挿入された「ン」の字のこと。「待つにござりたい、いとしのン君や」の「ン」をいう。

和歌山県にも全国に誇る「節」がある。それは、「串本節」である。

串本節は、東牟婁郡串本町田原から同町和深の漁村で歌い継がれてきた民謡である。串本節の起源は定かではないが、江戸末期の寛永年間に、江戸で流行っていた「エエジャナイカ節」が伝わり、これが変形して串本節になったという説等がある。

串本節は、一種類だけではなく、各地域によりバリエーションがあり、「古座節」、「大島節」、「みさき節」とも称された。七七七五調の歌詞は100番以上あるともいわれ、串本の地名等が入った20番ほどが一般的である。

昨今、全国的に我が国特有の音楽がさびれつつある。串本節についても同様である。この情緒ある串本節を後世に残すべく、串本節保存会（平松節子会長）が活発な活動を行っている。2005年10月には、正調串本節が収録されたDVDが制作された。そこでは、串本町の情緒豊かな風景をバックに、正調串本節が唄われ、踊りが披露されている。

串本節の代表的な歌詞を下に記す。

- 1 ここは串本 向かいは大島 中をとりもつ 巡航船よ
※アラ ヨイショ ヨイショ ヨイショ ヨイショ ヨイショ
- 2 潮の岬に灯台あれ 恋の闇路は 照らしやせぬ
- 3 一つ二つと橋杭立てて 心とどけよ 串本に
- 4 わしのショラサン 岬の沖で 波にゆられて鰹釣る
- 5 大島水谷に かかりし舟は お雪見たさの潮がかり
- 6 わたしゃ串本 両浜育ち 色の黒いは ごめんなれ
- 7 障子あければ 大島一目 なぜに佐吉は 松の影
- 8 彼の娘よいこじゃ よっぼどよいこじゃ あの娘と暮らすなら三年が三月でも
- 9 日和や東風気じ 沖白浪じゃ 殿子やりりよか
- 10 わしら若い時 津荷までかよた 津荷のどめきで 夜があけた
- 11 親の意見と茄子の花は 千に一つのアダもない
- 12 つつじつばきは、岩山を照らし 脊美の子持は 浜照らす
- 13 岬みさきは 七浦みさき 潮の岬は荒滝じゃ
- 14 舟のともろに 鶯とめて 明日の大漁となかせたい
- 15 有田、田並の白堀の家は これも岬の 潮のかけ
- 15 ここは串本 向かいは大島 橋をかけましょ 舟橋
- 16 お雪請け出す 身請けの金は 伏せた茶碗の 中にある
- 17 ついておいでよ この提灯に けして苦勞は させやせぬ
- 18 二色袋に 二部金入れて いつも心は 上野空
- 19 潮岬に ドンと打つ波は 可愛い情人さんの 度胸だめし
- 20 お前百まで わしゃ九十九まで 共に白髪のはえるまで
(正調串本節保存会企画制作DVD-R「正調串本節」より)

この他にも数多くの歌詞が存在する。その一部を紹介する。

恋の串本 ただひと刺しに とげてみたい この思い
古座の黒島 鬼出た蛇出た 大きな蛇ぢやもの うそじゃげな
今日は下るか 明日下るか 眺め暮らすよ 須江崎を
抱いて寝もせず いとまもくれず わたしゃ港の かごの鳥
なってみたいや 岬の鰹 主のえさくて 抱かれない
よいしょよいしょで 儲けた金を よいしょよいしょで ちゃめちゃめちゃこ

串本節は、その地方に根付いた歌である。そのため、土地土地により唄う視点が変化する。代表的なのは大島で唄われている串本節である。大島では、次のように唄われているようである。

<大島版串本節>

ここは大島 向かいが串本 中をとりもつ 巡航船よ

1999年9月8日、大島と串本を結ぶ「くしもと大橋」が開通した。かつて離島といわれた大島も、近代的な橋が架かり陸続きとなった。串本節で歌われた、情緒豊かな「巡航船」も今はその役目を終え、ひっそりと歴史の片隅に残るのみである。全国的にさびれつつある我が国特有の音楽であるが、この「串本節」は未来永劫唄い継がれてほしいものである。

5 根来の子守歌

モーツァルトの子守歌、フランスの子守歌、五木の子守歌等、世界中に子守歌がある。子守歌とは、文字通り、幼児を眠らせるための歌、あるいは、あやしたり遊ばせたりする歌である。そのような意味合いのため、ゆったりとしたリズムの曲や、シューベルトの子守歌のように、明るい曲が多い。しかし一方、もの悲しい歌もある。それらの楽曲の多くは短調系で作られ、自分の境遇を嘆き悲しむ様子が感じられる。総じて日本の子守歌の多くは短調系で作られている。日本音階の特徴かもしれないが、哀愁を感じるのも事実である。

和歌山県にも有名な子守歌がある。岩出町に伝わる「根来の子守歌」である。岩出町と聞いて思い起こすのは、根来寺である。根来寺は、新義真言宗総本山として、大治元年（1126年）に建立された古刹である。室町時代には、院98、僧坊2700、寺領70万石、僧兵2万人以上を抱え、紀伊、和泉、河内に一大勢力を誇った時期もあった。1585年には、豊臣秀吉によって全山焼亡の危機に瀕したが、隆光（紀州初代藩主である徳川頼宣や五代将軍である徳川綱吉が帰依）の活躍により復興し現在に至っている。現在、根来寺には、国宝の大塔をはじめ、国指定重要文化財の大師堂など、貴重な建造物が残り、往事の栄華の跡を忍ばせている。

根来の子守歌について、岩出町ホームページに次のような記述がある。

根来の子守唄は古く江戸時代の昔から歌い始められたものと推考され、根来寺を中心に紀の川筋一帯と、南は有田地方まで歌い継がれてきたもので、歌詞もその多くは根来寺に関連のあるものが歌い込まれて、その歴史が語り継がれている。近年では、この大切な伝統文化を後世に残そうと「根来の子守唄保存会」が中心となって活動を行っています。また「子守唄サミット&フェスタ」を全国の子守唄の発祥地7市町村で持ちまわりで開催し、各地で交流を深めながら子守唄の継承・普及に努めている。

日本の古来から伝わる祭囃子や盆踊り歌は、代々、耳から耳へと伝えられた音楽である。そのため、時代により歌い方は微妙に変化する。また、採譜を試みても、歌い方により同じ曲にはなりにくいのが現状である。かつて、筆者が小学校に勤務していた時、地域に伝わる祭囃子の採譜を依頼されたことがあった。祭囃子には、装飾音等、独特な表現があり、西洋の記譜法では対応不可能な箇所が多くあったのを思い出す。

楽譜9は、筆者が入手した楽譜である。

楽譜9



ねんね ねごころの ようなるかねはよ
いさり きこえて にりーひーびくよ

- 1 ねんね根来のようなる鐘はよ
一里きこえて二里ひびくよ
- 2 ねんね根来のかくばん山でよ
としより来いよの鳩が鳴くよ
- 3 ねんね根来へいきたいけれどよ
川がおとし紀ノ川がよ
- 4 さんささかもとほうきはいらんよ
おふどまいりのすそではくよ
- 5 ねんね根来のとどのまえでよ
よこにはうかよがりゅうまつよ
- 6 さんささかもとむろやのむすめよ
嫁入りしたとてじゅうじゃいけよ

岩出町から、「根来の子守歌」のCDを取り寄せて聴いたが、この楽譜とは異なっていた。聴き伝えの音楽のため、バリエーションが多々あるのも事実である。それを採譜するのは至難の業である。筆者もCDを聴き採譜を試みたが、困難を極めた。

串本節の項でも述べたが、近年、日本の伝統音楽はさびれつつある。根来の子守歌も、現在、「根来の子守唄保存会」が中心となり、普及に努めている。この素晴らしい歌を後世に歌い続けてほしい。

なお、歌詞はいろいろなものが残されているが、「ねんね根来のかくばん山でよとしより来いよの鳩が鳴くよ」の歌詞だけは、どの歌にも含まれているそうである。歌詞の内容は、豊臣秀吉の焼き討ちの際、助けを乞うた心をあらわしたものだという説があるが、その真意は定かではない。

6 和歌山県の音頭

「音頭」とは、日本の民謡の一種類である。雅楽の音頭（おんどう）からきたもので、最初の一句を一人が歌い出して全体をリードし、曲の途中で囃子ことばを歌うような、「かけあい形式」を持った民謡をいう。「木遣り」や「盆踊り歌」のほとんどがこの形式で、「秋田音頭」や「秩父音頭」が有名である。

和歌山県にも、多くの音頭がある。いくつかを紹介する。

楽譜10は、壇上春清作詞、中山晋平作曲の「白浜温泉音頭」である。

白浜温泉は、有馬、道後とともに、日本三古泉の一つに数えられている。その歴史は古く、飛鳥、奈良時代から、「牟婁の温湯」「紀の温湯」の名で知られ、齊明天皇、持統天皇、天武天皇が行幸した記録が日本書紀、万葉集、続日本書紀等に記載されている。

白浜温泉には、湯崎七湯の一つとして知られる「崎の湯」の他、白浜のシンボルである「円月島」、太平洋に突き出た壮大な大岩盤の「千畳敷」、高さ50mの断崖の「三段壁」、雪のように白い砂浜の「白良浜」など、観光名所が数多くある。

楽譜10

1 ハアー 万葉集で白良の温泉の煙 ヨイヤサ
 匂う浜木綿 エエ星明かり 湯崎恋しや 五位鷺さえも チヨイチヨイ
 灯目あてに 通て来る
 さあさ踊ろよ白浜音頭 ショコショコショコヤッサイサイ

2 ハアー つつじ山から あの瀬戸崎へ ヨイヤサ

- 誰が掛けたか エエ虹の橋 想う心を つばめにのせて チョイチョイ
 ほんにあの橋 渡りたや
 さあさ踊ろよ白浜音頭 ショコショコショコヤッサイサイ
- 3 ハアー ゴルフしましょか ボートに乗るか ヨイヤサ
 こころ朗らか エエ踊る胸 泳ぎ疲れて 銀砂に睡りや チョイチョイ
 夢を彩る 桜貝
 さあさ踊ろよ白浜音頭 ショコショコショコヤッサイサイ
- 4 ハアー 湯もや立つなら ほのぼの立ちやれ ヨイヤサ
 月に墨絵の エエ円月島 君を松原 想いは燃えて チョイチョイ
 あがる花火も 空焦がす
 さあさ踊ろよ白浜音頭 ショコショコショコヤッサイサイ
- 5 ハアー 見やれ三段壁や 夕焼小焼 ヨイヤサ
 波をくぐるは エエ鶴の鳥か 誰が刻んだ 千畳敷に チョイチョイ
 さあさ踊ろよ白浜音頭 ショコショコショコヤッサイサイ

作曲者の中山氏は、東京音楽学校（現・東京芸術大学）卒業の作曲家である。中山氏は、日本の大衆歌謡に大きな足跡を残した作曲家として知られている。主な作品として、松井須磨子が歌い、大正時代を象徴する曲となった「カチューシャの唄」の他、童謡「てるてる坊主」「砂山」、歌謡曲「船頭小唄」「波浮の港」「出船の港」「東京行進曲」などがある。

筆者は、白浜町の隣町に住んでいるが、毎年、盆踊りの季節になると必ず白浜温泉音頭が登場する。紀南地方の盆踊りの定番といっても過言ではない。歌詞には、白良浜や三段壁等に自生している白浜町の花である「はまゆう」が、また、「湯崎」「瀬戸崎」「円月島」「三段壁」「千畳敷」といった、白浜町を代表する景勝地が描かれている。



朝靄に煙る円月島

曲は、付点八分音符と十六分音符の組み合わせのメロディが大半を占めている。軽快な速さでリズムにのりやすい曲である。

この他、白浜温泉には、「白浜節（津本孝一作詞、森本盛太郎作曲）」、「湯崎音頭（水谷雅夫作詞、近藤十九二作曲）」、「白浜小唄」などの歌もある。

楽譜11は、島田陽子作詞、池田八声作曲の「龍神りゅうりゅう音頭」である。

龍神温泉は、川中温泉（群馬県）、湯の川温泉（鳥取県）とともに、日本三大美人の湯と呼ばれている。龍神温泉は、役の行者が発見し、その後、弘法大師が難陀龍王の夢のお告げによって開いたことから龍神温泉の名がついたと伝えられ、約1200年の歴史を誇っている。江戸時代には、初代紀州藩主である徳川頼宣の別荘地となり、代々紀州徳川家の湯場として大いに栄えた。今も、「上御殿」「下御殿」という旅館にその名残を留めている。

歌詞には、和歌山県の最高峰である護摩壇山に源を発する日高川や、鮎、紅葉、樹氷など四季折々の風情が詠まれている。軽快な印象を与える曲で、特に、17小節目からの、「りゅうりゅうりゅう」の歌詞とリズムが特徴的である。

歌詞、楽曲ともインパクトがある音頭である。

あ あ い やま なみ おしわけ ながー ら
 りゅう が うね る よ はしって いーく よ あれ
 は あい で いちばん ながー い りゅう
 じん 生まれの ひだーか が わ
 りゅうりゅうりゅう りゅうりゅうりゅう りゅうにんりゅうのまど あす
 を めざして りゅうりゅう と

- 1 青い山なみ押しわけながら
 龍がうねるよ走っていくよ
 あれは紀州でいちばん長い
 龍神生まれの日高川
 ※りゅうりゅうりゅう
 りゅうりゅうりゅう
 龍神 龍の里
 未来を目指してりゅうりゅうと
- 2 お肌つるつるころも和む
 古い歴史の龍神温泉
 浮世わすれる美人のお湯に
 みんな誘ってまたおいで
 ※（くり返し）
- 3 鮎が躍ればヤマセミとんで
 滝がとどろくコメツツジ咲く
 秋は紅葉に太鼓がひびき
 祭りにうれしいふるさとよ
 ※（くり返し）
- 4 スカイラインは緑の尾根を
 冬は樹氷に見惚れていくよ
 しのぶ伝説 護摩壇山に
 立てばひらけるよい眺め
 ※（くり返し）
- 5 杉や檜に抱かれて暮らしや
 やる気元気があふれてくるよ
 夢も大きな木の郷づくり
 若い笑顔で伸びていく
 ※（くり返し）

7 和歌山県の特産品を扱った歌

和歌山県は、温暖な気候や風土に恵まれ、「みかん」「梅」「柿」「もも」「備長炭」等々、多くの特産品がある。中でも、「紀州みかん」は、全国的に名の知れたブランド品である。有田地方周辺には、みかん山が数多くあり「紀州みかん」を全国に送り出している。

有田市には、みかんを歌った歌が残っている。数編紹介する。

下は、「有田みかんつみ唄」である。

有田みかんつみ唄

沖の暗いのに 白帆が見える あれは紀の国 みかん船 みかん船
 江島唄うて 向かいの山で みかん採るのは わしの殿 わしの殿
 今度いんだら 持て来ておくれ 有田みかんの 枝折りを 枝折りを
 有田みかんと 道楽息子 色ではだかに なりまする なりまする
 有田よいとこ みかんどこ茶どこ 娘やりたや 婿ほしや 婿ほしや
 みかん船なら はよ漕げ船頭 沖の暗いのは 雨じゃそな 雨じゃそな
 祝い目出度の 帆を巻き上げて 入るぞ お江戸の品川へ 品川へ

元唄は、江島節と伝えられている。江戸時代、江島新之丞という宮仕えの侍が主君の勸気に触れて浪々の身となり、山田原村（現・有田市山田原）にたどり着き定住した。江島新之丞は、生活の糧を得るため、みかん採りに雇われ、その時に唄ったのが江島節の起源と云えられている。

「沖の暗いのに 白帆が見える あれは紀の国 みかん船 みかん船」、荒海の中を決死の覚悟で船出し、巨万の富を手にした「紀伊国屋文左衛門」の夢とロマンを彷彿とさせる歌詞である。

下は、西川好次郎作詞の「有田音頭」である。

有田音頭

アー 有田むすめの 笑顔をそえて 旅のみやげはみかんかご
ヨ 空で見おくる愛宕の山の 月もにっこりみかん色
ヤンレヨイヨイ みかん色 サッサおいでよ有田市へ 一度来るなら夢も来る
アー 呼ぶは宮原 鶺鴒いのあかり まねく箕島あげ花火
ヨ 燃えてちらちら川波さえも 蚊取線香のうづ模様
ヤンレヨイヨイ うづ模様 サッサおいでよ有田市へ 一度来るなら夢も来る
アー さすが初島 十万トンの船がつくつく石油どこ
ヨ のびるこだまで楚都浜ゆれりゃ ふわりウエノの花がちる
ヤンレヨイヨイ 花がちる サッサおいでよ有田市へ 一度来るなら夢も来る
アー 誰と行きましょ オレンジ・ウェイ あれは矢櫃の帆立岩
ヨ 見どこ唄どこあこがれどころ 男浦女ノ浦 君を待つ
ヤンレヨイヨイ 君を待つ サッサおいでよ有田市へ 一度来るなら夢も来る

有田市の名所を表した詞の中に、「みかんかご」「みかん色」「オレンジ・ウェイ」等、特産品の「みかん」に関係する言葉が随所にちりばめられている。

この他、みかんを読み込んだ歌として、木下元二作詞の「有田みかん音頭」、くるみ広彰作詞、くるみ敏弘作曲の「有田川小唄」等がある。

8 おわりに

国際化、グローバル化と言われている中、子どもたちが、狭い日本にとどまらず、世界を相手に活躍してほしいと常々願っている。しかし、そうするためには、まず自国を知る必要がある。ふるさとを愛する気持ちを持ってこそ、国際人として活躍ができると考える。調査を進めるうちに、自分自身、あまりにも、ふるさと和歌山のことを知らないことに気がついた。拙著であるが、歌を通じてふるさとを知る一つのきっかけになればと考える。

最後に、本研究を進めるにあたり、御指導・御協力をいただきました方々に、心より厚く御礼申し上げます。

<引用文献>

- ※1 西川好次郎著『山びこよ雲にのれ』『山びこよ雲にのれ』刊行委員会 pp 284 - 285(1985)
・日本音楽著作権協会(出)許諾第0601348-601

<参考文献>

- ・目黒三策編『標準音楽事典』音楽之友社(1991)
・戸口三策著『クラシック音楽事典』(2001)
・石桁真礼生、末吉保雄、丸太昭三、飯田隆、金光威和雄、飯沼信義著『新装版楽典の論と実習』音楽之友社(2002)